# A Report on 2002 SBL International Meeting/The Heidelberg Conference on Rhetoric, Ethics and Moral Persuasion/SNTS Durham 2002


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2021-02-01<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 原口, 尚彰<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24409 |

[国際学会報告]

# アメリカ聖書学会2002年度国際大会/聖書的言説におけるレトリック，倫理と道徳的説得に関するハイデルベルク会議/2002年度国際新約学会ダーラム大会報告

## ——(A Report on 2002 SBL International Meeting/The Heidelberg Conference on Rhetoric, Ethics and Moral Persuasion/SNTS Durham 2002)——

原　口　尚　彰

2002年の7月中旬から，8月初旬にかけて，ドイツとイギリスで開催された新約聖書学関係の三つの国際学会に参加した。最初に参加したのは，7月19日から22日にかけてベルリンのフンボルト大学で開催された「アメリカ聖書学会2002年度国際大会（2002 SBL International Meeting)」である。アメリカ聖書学会（Society of Biblical Literature）は，アメリカのアトランタに本拠を置く聖書学会であり，アメリカ人だけでなく，海外の様々な国の聖書学者やユダヤ教学者達を会員に擁しており，私もアメリカ留学中の1987年以来，この学会の

会員となっている。この学会は，毎年11月にアメリカまたはカナダで学術大会を開催すると他に，7月に北米以外の地域にある国で国際学会を開催している。今年はドイツのベルリンで開催されることになり，世界中から総計300人程の学者達が参加した。この学会には毎年，アメリカやイギリス等英語圏の学者の参加が多いが，今回の国際学会は，スウェーデンやフィンランド等の北欧や開催国のドイツからの参加が多いのが目立った。

開催地のベルリンは，再統一後復興が大分進み，首都としての体裁を整えてきているが，町の随所に帝政時代の名残や，ナチス・ドイツ時代の爪痕，第二次大戦時の爆撃と破壊，戦後の分断時代の歴史の傷跡が重層的に折り重なって見える町であった。学会のホストとなったフンボルト大学神学部は，元々はフンボルトがシュライエルマッハーの助力を得て設立したベルリン大学の神学部であり，戦前は世界の神学研究の中心地の一つであった。しかし，戦後の分断時代には東独に属したためカール・マルクス大学と改称され神学部は閉鎖されていた。東西ドイツの再統一後に，この大学はフンボルト大学と改称され，神学部が再開され今日に至っている。聖書学や古代教会史の部門において，かってアドルフ・ハルナック，ヘルマン・グンケル，ヨハンネス・ヴァイス，アドルフ・ダイスマン，ハンス・リーツマン等の巨匠が講壇に立ったのもこの大学である。現在のフンボルト大学神学部は，新約部門にハンス・ゲップハルト・ベートゲとキリエルス・ブライテンバッハという緻密な学風の学者を擁し，新約学において少しずつ存在感を増してきている。

この国際学会は，旧約学とユダヤ教学と新約学関連の諸分科会を設

定し，同時進行で一斉に研究発表と討論を進めて行く形式をとっている。旧約・ユダヤ教部門では，旧約神学，旧約聖書の研究法，モーセ五書，預言，知恵文学，メタファー，クムラン研究等の分科会が設けられ，新約部門では，ベッサイダ発掘調査報告，新約神学，方法論，共観福音書，パウロ書簡，ヘブル書，フェミニスト聖書解釈，修辞的批評，本文批評等の分科会が設けられた。私は主としてパウロ書簡と修辞的批評の分科会に参加し，パウロ書簡のセクションでは，Paul's Remembrance of his Personal History: A Rhetorical Analysis of Galatians 1: 10-2: 14（「パウロによる個人史の回顧：ガラテヤ1: 10-2: 14の修辞学的分析」）という題で研究発表をした。この学会には著者や論文によって良く知られた大家たちとまだ無名の若手達が対等に研究発表と討論をする自由な雰囲気があり，若手の一つの登竜門となっている観がある。また，英語圏では着想や方法論の新しさを競う傾向があるのに対して，ドイツ語圏では堅実な釈義に基づいた緻密なテキスト解釈を重視する傾向があるのが目立った。この国際学会は，来年はイギリスのケンブリッジにおいて，7月20日から25日にかけて開催される予定である。

ベルリンの学会の後に，ドイツ鉄道のインターシティで西進し，マインツで乗り換えて，ハイデルベルクに着いた。この古城の辺の古都では，7月22日から25日まで，「聖書的言説におけるレトリック，倫理と道徳的説得に関するハイデルベルク会議（The Heidelberg Conference on Rhetoric, Ethics and Moral Persuasion）」が開催された。この会議は，聖書の修辞学的研究に関心を持つ世界中の学者達が，1992年以来，二年毎に開催している「聖書の修辞学的解釈に関する国際学

会（The International Conference on Rhetorical Interpretaion of the Bible）」の一環である。「聖書の修辞学的解釈に関する国際学会」の第一回会議は，1992年にハイデルベルクで開催されたので，今年はその一〇周年を記念して再びハイデルベルクが開催地に選ばれたのであった。

会場は，アメリカのカリフォルニアに本拠を置くペッパーダイン大学がハイデルベルクに保有するセミナーハウスであった。参加者は修辞学的批評に関心を持つ聖書学者と古典学者であり，アメリカ，オランダ，スウェーデン，南アフリカ，ドイツ，日本から，合計30人が参加した。日本からの参加は，敬和大学の山田耕太と筆者だけであった。この学会のユニークな点は，連絡がすべて電子化されており，事務局の連絡もインターネット・サイトに設けた掲示板と電子メールで行われ，郵送による連絡は無いことである。研究発表原稿もインターネットのサイトに掲示され，参加予定者はそれを自分でダウンロードして予め読んでくることが求められている。インターネット時代に入ったこれからの学会運営は，この形式が主流となって行くと考えられる。他方，この学会は30人という比較的少数の参加者が同一の場所に寝起きしながら，合宿形式で，集中的に研究発表と討論を繰り返して行くので，会議の終わりには自然な連帯感が醸し出されていた。会議の終了後には会議の感想や反省が電子メールで送られてきており，フォローアップもしっかりしていた。会議の成果は，ルンド大学のアンダース・エリクソンの世話によって，一つの論文集として出版されることが決まっている。次回会議は，二年後に南アフリカのプレトリアで開催される予定である。

会議全体の進行は，ホスト役であり，事務局を引き受けたペッパーダイン大学のトマス・オルブライトが担当したが，議論を主導したのは，エモリー大学のバーノン・ロビンスである。今回の会議はレトリックと倫理の関係に焦点をあて，13の研究発表に加え，エリザベト・シュースラー＝フィオレンツァの基調講演とバーノン・ロビンスの総括が行われた。レトリックと倫理との関係は多岐にわたり，フィオレンツァのように修辞学的批評に携わる者の倫理的姿勢を問う者もあれば，演説者のエートスの問題を論じる者や，演説が採り上げる題目として倫理の問題を採り上げ，同時代の倫理思想との関連を論じる者等もあった。修辞学批評の方法論としては，古典古代の修辞学の理論的枠組みから出発する者と，新約聖書に見られる修辞法とヘレニズムの修辞法との乖離が大きいので，聖書的レトリックや教会的レトリックという全く別の理論的枠組みを構築しようとする者，また，現代修辞理論によってテキスト分析を試みる者の三つの流れが混在していた。この辺りの交通整理は重要であろう。

8月6日から10日にかけて，イギリスのダーラム大学を会場として，2002年度の国際新約学会学術大会（SNTS Durham 2002）が行われた。大会の実施主体は，Studiorum Novi Testamenti Societas であり，日本では「国際新約学会」と呼び慣わしている。この会は世界の主要な新約学者たちから構成される学会であり，会員二名以上の推薦と博士論文と教授資格請求論文が公刊されるか，それに相当する業績を持っているのが入会の前提条件である。会員は著書によって良く知られている学者達が中心であり，年齢層は比較的高い。今回の参加者総数は385人であり，日本からは7名が参加した（但し，うち2名

は会員ではなく，ロンドン大学博士課程に在学中の学生とセント・アンドリュース大学に留学中の博士課程の学生の陪席である)。

今回の開催地に選ばれたダーラムは，ロンドンから特急で三時間ほどの所にある古い大学町であり，中心となる丘にはダーラム城と大聖堂が聳え，中世以来の石造りの町並みが保存されている中に，大学の校舎が散在している。神学教育を行うはセント・ジョンズ・カレッジであるので，今回もこのカレッジが学会受け入れの母体となって世話にあたった。現在は大学の建物の一部として使用されているダーラム城は，元々は大聖堂を主管するダーラム主教の居城であり，ダーラム地方全体の領主兼，ダーラム管区の司牧者として，スコットランドとの国境地域の防衛の任務を帯びていたそうである。国家と教会と大学が一体となった国教会制度の名残がここには存在している。今回の学会のホスト役は，ダーラム大学神学部教授ジェイムズ・ダンであり，彼は同時に今年度の国際新約学会会長でもある。かってダーラムには，ウェストコットやジョン・ライトフットといった主教と神学部教授と兼任した新約聖書学の巨匠達が活躍した歴史がある。また，ダンの前任者のチャールズ・キングズリー・バレットも第一，第二コリント書や使徒言行録の注解書で知られる新約学会の長老である。会議は大聖堂に付設された柱廊で行われた大学主催のレセプションで幕を開けたが，第二日はダーラム市長主催の晩餐会と大学主催のコンサート，第三日にはダーラム主教主催の晩餐会と続き，イギリスの教会や社会に残存する貴族文化の片鱗に触れる思いであった。

会議で言語は，英語・ドイツ語・フランス語の三カ国語のどれかを用いればよいことになっているので，三カ国語が入れ混じる形になっ

ているが，一番使用頻度が高いのが英語で，これにドイツ語とフランス語が続いていた。会議は，会長講演と研究発表とセミナー・グループという三つの要素からなっている。会長講演（Presidential Address）を担当したジェイムズ・ダンは，生ける伝統としての新約伝承の口承性と共同体性を強調した。研究発表は，主催者である学会が予め指名した学者達が行う，主要論文（Main Papers）の部と，会員から公募して選んだ「公募論文（Offered Papers）」の部とがある。主要論文（Main Papers）の部では，フンボルト大学のキリエルス・ブライテンバッハが，パウロによるキリストの死の解釈の背後に，ヘレニズム的・或いは，ヘレニズム・ユダヤ教的な代理の死の観念が存在することを論じた。二番目の主要論文において，ノートルダム大学のデイビッド・オーニーは，ヘレニズムの修辞学においてエンシューメネー（説得推論）の機能を論じ，論理性と説得性が別物であることを指摘した。古典学と接点を持ちつつ新約学研究を行うのはアメリカの新約学の一つの有力な流れとなっている。三番目の主要論文は，フランスのパリ・カトリック神学院のミッシェル・ケスネルによって読まれた。この論文の中でケスネルは，ローマ書 9-10 章の中に描かれるモーセ像において，選ぼうとする者を選ぶ，頑なにしようとする者を頑なにする救済史における神の慈悲と自由な行動が示されていると主張した。果たして，非常に狭い箇所を採り上げて少ない証拠の上に，このような一般的神学命題を読み込んで良いのかどうか，方法論上の疑問が残る研究発表であった。四番目の主要論文において，ライデン大学のヘンク・デヨングは，マルコ福音書におけるイエスの宮清めの記事の背景に（マルコ 11：15），ゼカリア 14：21 の影響があることを指

摘し，この部分の伝承形成をイエスの宮清めの出来事のうちに「主の日」を到来を見た復活後の教会に求めた。デヨングは，マルコ福音書の著者は，この伝承をユダヤ戦争時の神殿崩壊の予表として解釈して受容したと考えている。いささか古くなった観がある伝承史的分析であるが，ヨーロッパではまだまだ根強い人気があるようである。

「公募論文(Offered Papers)」の部では，45分ずつの三つのセッションが同時進行で三回もたれた。W・S・キャンベル，M・D・グールダー，T・W・マーティン，T・L・ドナルドソン，J・フォルツJ・ランブレヒト，D・C・パーカー，G・ダウニングらが，発表者であったが，私も第二回目のセッションでA Rhetorical Study of Peter's Temple Speech in Acts 3: 12-26（「使3: 12-26におけるペトロの神殿説教の修辞学的研究」）という題で研究発表を行い，修辞学的解釈と使徒言行録に関心を持つ学者達と主として方法論についての議論を深めることが出来た。

セミナーの部は，主題毎に16のグループに分かれて行われた。私は，Paul and Rhetoric（「パウロとレトリック」）のセミナー・グループに参加した。このセミナー・グループのリーダーは，ボストン大学のポール・サンプリーとハイデルベルク大学のペーター・ランペであり，三回セッションのそれぞれにおいてウェッブサイトに掲示された発表者の論文を参加者がダウンロードして読んできて，二時間の間議論する形式であった。このグループが最初に採り上げたのは，ランペのRhetorische Paulusexegese（「パウロの修辞学的釈義」）である。ランペはパウロ書簡の本格的な修辞学的研究の歴史を，H・D・ベッツや，G・A・ケネディの古典的著作に始まり，最近のW・ヴユルナーによる

新修辞学の適用の試みや，V・ロビンスらの社会史的・修辞学的方法に至るまで描いて見せ，古代修辞学に依拠する方法と，現代修辞学や物語批評の方法とを混在させることに対して方法論上の混乱として警告を与えた。ランペ自身は，ローマを中心とした初期キリスト教の考古学的・歴史的研究に従事してきた研究者であり，修辞学的研究には距離を保って来た。彼のいわば外からの批判は，新約聖書の修辞学的研究の方法論的前提を再度根本的に反省するのに有効であろう。

第二回セッションは，メイローン大学のデュエイン・ワトソンの Types of Rhetoric-Judicial, Deliberative, and Epideictic-and the Study of the Pauline Epistles（「レトリックの類型（法廷的・助言的・演示的）とパウロ書簡研究」）に基づいて議論を行った。ワトソンは，そのデビュー作 Invention, Arrangement, and Style-Rhetorical Criticism of Jude and 2 Peter (SBLDS 104 ; Atlanta : Scholars, 1988) 以来，G・A・ケネディの修辞学的分析モデルを適用して，新約書簡の修辞学的分析を精力的に行ってきた学者である。彼が旧約学者の A・ハウザーと共著で刊行した Rhetorical Criticism of the Bible : A Comprehensive Bibliography with Notes on History and Method (Leiden : Brill, 1994) は，今まで刊行された聖書の修辞学的研究についての最も包括的な文献目録を提供し，修辞学的研究に従事する研究者達に文献検索の便利な道具を提供してきた。今回の論文においてワトソンは，法廷的・助言的・演示的というヘレニズム演説の三類型の特色を述べた後，七つの真正パウロ書簡がそれぞれどの類型にあたるかについて，様々な学説を整理紹介した。ワトソンは，ランペと違って，新約聖書の修辞学的研究に早くから身を置いて中心的な役割を

担って来た人物であるが，現在は自分が推進してきた修辞学的方法に次第に疑問を抱き，新しい方向を模索している印象を与えた。ワトソンによると，ヘレニズム修辞理論と新約書簡との間には，社会的場や文化的伝統において大きな距離があり，新約書簡を機械的にヘレニズム修辞理論を当て嵌めて分類することには無理があるというのである。それでは，ヘレニズム修辞理論に代わる包括的分析モデルは何かということになるが，ワトソンは初期キリスト教固有のレトリックの探求の必要性を指摘しただけで，その具体的内容については漠然としていた。

第三回のセッションは，シカゴのギャレット神学校名誉教授で，現在はハイデルベルク大学客員教授のロバート・ジューウェットの Rhetorical Examples from Romans（「ロマ書より採択した修辞法の範例」）について議論した。ジューウェットは，Thessalonian Correspondence（Philadelphia : Fortress, 1986）で，第一，第二テサロニケ書に，修辞学的批評の方法を適用して見せた学者であり，現在はローマ書の修辞学的分析に取り組み，この書簡が Ambassadorial Letter（「外交使節的書簡」）であるという主張をしている。この主張自体は面白い見方であるが，今回の議論においてはこの中心テーゼ以前に，彼のローマ書全体の読み方が問題となった。ジューウェットによると，ローマ書中心は信仰義認のテーゼを提示する 3-5 章でなく，倫理的勧告を与える 12-15 章であり，12-15 章は probatio（論証）を構成しているとする。この辺りの議論が強引すぎ，牽強付会な印象を与えたために，筆者を含む参加者達から異論が相次ぎ，Ambassadorial Letter という中心テーゼを論じるまでに至らなかったのは残念である。

国際新約学会次回大会は，2003年7月29日より8月5日にかけてボン大学を会場に開催されることが決まっている。

三つの国際学会を通して感じたのは，日本の新約学会の現状と国際学会の現状との大きなギャップである。第一に，日本にもある程度発達した新約学の世界が存在しているのに，日本語という言語の壁のために海外にはあまり知られていない。日本の学者達には海外の大学で学位を取得し，西欧語で書いた学位論文は海外で出版され，ある程度認知されている者もいるが，彼らが帰国してからの学問活動は殆ど知られていないのである。日本という土地に神学的思考を根づかせるためには，日本語で著作活動を行うことが必要であることは事実である。しかし，国際的な場で対話をしつつ聖書学を行っていくためには，西欧語で著作や論文の執筆活動をおこなったり，国際学会で研究発表を行って，世界に向けた発信作業を怠らないことも大切である。第二に，新約聖書の修辞学的研究は日本では山田耕太と筆者の二人しかおらず，いくら研究発表を繰り返してもさっぱり理解されないが，海外では既に主要な研究法の一つとしての地位が確立しており，かなり高いレベルでの対話をすることが可能であるということである。国際学会にやって来て研究発表を行ってみて，修辞学的分析に基づいた私の研究に対して，聴衆から初めてまともなリアクションが返って来たという印象が強い。国内にはいない対話の相手を求めるということも，国際学会に出席するメリットの一つなのである。